千刈狸の呟き

～ 狸の読書歴から ～

本読み狸

しばらく前の朝日新聞にドイツ文学者の小塩節氏の訃報が小さく載っていた。面識は勿論ないが、もしお会いすることができたなら、楽しいお話ができて、至福の時が持てたのではないか、そんな妄想を持たせてくれるような印象を受けていた。

多くのエッセイが出版されているが、氏の文章からは、憧れや郷愁、人と出会う喜び、そして懐かしさが滲み出される。音楽や芸術、文学とそれらを巡る旅、師友との交流などが主なテーマとなっている。エッセイの他に大きな仕事では、トーマス・マンの長編小説『ヨセフとその兄弟』を旧制松本高校時代の恩師望月市恵氏の下訳を基に共訳として出版された。旧約聖書の創世記にあるアブラハム、イサク、ヤコブ、そしてヨセフの物語りから編み出された一大叙事詩で教養小説とも言える内容である（要らぬこととは思うが、教養小説とは所謂教養ではなく、主人公の成長を描く小説のことで、『魔の山』や『ジャン・クリストフ』なども教養小説とされる）。「過去と言う井戸は深い。底なしの井戸と呼んでいいのではなかろうか。人間という存在の過去だけをとりあげて物語り論ずる場合でさえもそうであり、いやひょっとするとまさにその場合にこそ、過去という井戸は底なしなのだろう。実際、この謎にみちた人間という存在は、私たち自身の自然のままのありようからすれば悦楽にみちていながら、超自然の目からみると悲惨な生涯を包含している。」引用が長くなってしまった。どうしても途中で切ることができなかった。この冒頭の文章にすっかり魅了されてしまった。仕事の合間をみては読み続け、いつしか聖書を横に置いて対比しながら、半年程かけて読み終えた。長い物語の最後は以下の文章で締括りとなる。「かくして、ヨセフとその兄弟たち－について神がたのしく語られたこの美しい物語は終るのである。」

北　杜夫も松本高校時代に望月先生の授業でトーマス･マンに魅せられたひとりで、代表作「楡家の人びと」は「ブッデンブローク家の人びと」に触発されて書かれたことはよく知られている。

トーマス・マンは難解である。『魔の山』は何とか読み終えたが、結局よくわからない。『ファウスト博士』は半分程読んで諦めてしまった。いつの日か挑戦することがあるかはわからない。

小塩　節氏はトーマス・マン亡き後、カチア夫人とは夫人が亡くなるまで交流を続け、亡くなられた後も黄色のバラを持って墓参りされていると書いていた。

３年前の８月にドイツ文学者の池内　紀氏が亡くなられた。氏の名前は1999年にゲーテの「ファウスト」の新訳が出版されたことが話題になった事で知った。多くのエッセイ集が出版されており、書店で見つけると買っているが、絶版などで秋田では入手できなくなっているものも数多いと思う。

池内氏の本職はカフカと言うことで、先日池内訳「カフカ小説全集」を求めに書店に行ったところ、既に絶版で、ほぼ同じ内容の「カフカコレクション」が刊行されているとのことだった。全八冊のうち五冊のみ入手可能であった。

４年前には私が教養課程でドイツ語を教えていただいた大澤先生が亡くなられた。大澤先生についてはあまりにも多くの思い出があり、いつかは書いておきたいと思っているが、今回前稿で書き始めてみたものの、紙数にまとめることができなかった。前出の『ファウスト博士』は絶版になって手に入らなかったが、大澤先生にお願いして書棚からもらってきたものだ。やっぱりいつかは読まない訳にはいかないな。